

資 料

語りつぐ山口の福祉 —昭和30年代の児童問題と相談援助—

Voice of the Past : Oral History about the Child Welfare in Yamaguchi

語り手：坪 郷 康

Yasushi TSUBOGO

聞き手：加登田 恵 子

Keiko KATODA

はじめに

坪郷康先生は、1975（昭和50）年山口県立大学社会福祉学部の前身である山口女子大学文学部に勤務されて以来、1996（平成8）年に定年退職されるまで、臨床心理学の担当として教鞭を執っておられた。また同時に、1954（昭和29）年に山口県に入職されて以来、40有余年の長きにわたって、山口県初の心理職として臨床心理の立場から山口県における児童相談活動の指導的立場におられ、その経歴から言っても、山口県における児童相談活動についての生き証人として、重要な人物の一人である。

本稿は、山口県における社会福祉実践史研究の基礎的史料とするために、先生が児童相談所に勤務され始めた昭和30年頃を中心に、当時の山口県における児童相談の状況と臨床心理士としての先生の実践について聞き取り調査したものである。¹⁾

なお、文責は加登田にある。（以下、〈T〉は坪郷、〈K〉は加登田）

1. 影響を受けた人々

〈K〉まず、先生がどういう経緯で児童福祉の現場に関わるようになったのか、という辺りからお話いただけますか？

〈T〉立派な先輩がたくさんいらっしゃったのですが、私は1930（昭和5）年生まれですから、御指導頂いた先生方は、皆さんあの世に逝かれたから、結果的に私が一番年上ということになるん

じゃないかと思えます。まあ、いらっしゃってもかなり高齢特有のパーソナリティーが入って居られたりするんで、皆さんに紹介しにくい状況ですね。

ただ、一人だけ鼻地三郎先生²⁾という、お化けのような人がいらっしゃいますけれど。この方は福岡の「しいのみ学園」の園長先生で、もう100歳を越えましたけれど、まだ現役でバリバリやっています。今中国に障害児の大学を建設中だそうです。素晴らしい方です。僕らも会いますと必ずお叱りを受けるような、素晴らしい方です。

広島大学の私の先輩ですけども。お子さんが2人とも脳性小児麻痺で、誰も面倒見てくれないからということで、「しいのみ学園」というのを奥さんと2人でお作りになり、現在もやっています。その方が、ハンディキャップ・チャイルドとの関わりや、生き様からなにか、技術から、ある意味で全ての私の師匠さんです。

残念なことに、昭和25年当時、大学では障害児を専門にする人たちはいませんでしたし、身近に専門家は一人もいませんでした。だから、結局外へ外へとコンタクトをつけて行かなければなりませんでした。

しかし、外のそういう方との出会いが、結局幸いしたんだと思えます。その方々が皆さん立派になられたしね。

今病気になられて、その後どんな状況かわかり

ませんけれど、河合隼雄先生³⁾なんか、私より一つ年上ですかね。当時は大阪の児童相談所へいらっしゃって、若いときから素晴らしい方でした。その後、学問的にどんどん進めていかれたので、これから何年か経ったら、ひょっとしたら却って批判をお受けになるかもしれない。というのは、みんなファンになっちゃって、河合先生じゃないと夜も昼もあけないと言う状況というタイプの先生になりました。だけど外国に行ってみたら、日本で言われているほど皆さんは知らないと言われて。私ども日本の臨床心理学は、河合先生の強い影響を受けて、少し歪んでいたんじゃないかなあ、みたいになっています。未だに精神分析、精神分析って言っていますからね。それは、ちょっとまずいな、という風に思っていますけど。

2. 戦後障害児教育の開拓者たち

<T>私は実は昭和29年に大学を卒業して、最初は聾学校に配属され、1年遅れて30年に児童相談所に入ったのです。その時の最初の担当が、知恵遅れ(知的障害)の子どもの問題でした。当時児童相談所の職員は、全部で12、3人しかいませんでしたし、大学出の専門家ということで、当時は児童心理判定員と呼んでいましたから、唯一の技術吏員という肩書きで入りました。それで肢体不自由児以外の全ての障害児については、何もかも全部私の所に来ることになりました。

知恵遅れと聾(ろう)については、少し大学在学中からやっていました。卒業論文では「正常の幼児と聾児の抽象能力の発達」というようなことをやりました。ということで、聾児には少し関心があったんです。

また後から申しますが、相談所に入りました時に、そういう形で色々やっているうちに、私の心理判定員という立場上、知恵遅れの子どもの少しでも正常に近づけようという感じになって、色々な子どもに知的な働きかけをしていく努力をしていました。しかし、結局それは無駄だということが後になって分かりました。この子達は、生涯知恵遅れのままでということですよ。

こういった私の思いの転機になったのは、牛島義友⁴⁾という九州大学の心理学の先生の影響です。この方も児童心理学では素晴らしく有名な、たくさんの著書のある方で、やはり知的障害児の治療教育の実践をしておられました。非常に影響力のある方で、距離的に近いということもあって、当時はやはり山口県全体を九州大学の教育学部の先生方がご指導しておられました。

その牛島先生という方も、素晴らしい方でした。最近お訪ねしていないのですが、静岡の「御殿場コロニー」という知的障害者の施設があります。当時から、先生は一時期の治療ではなく、生涯をこの子達と共にしなければいけないという方針で実践しておられて、その影響を受けたということでしょうか。

エピソードでお話しした方が良いと思いますが、山口県は当時、知的障害の領域では全国でも先駆的な働きをしていました。私は、こういう方たちの歴史を残していきたいと思いながら、まだ出来ていません。これからは、むしろ皆さんにお願いした方が良いのかもしれないですね。当時は、本当に立派な方がいらっしゃいましたよ。

九大の教育学部の中修三⁵⁾先生もユニークでしたね。今私の九大の友人に聞きますと、あの先生はちょっと変わった先生だと言われるんですよ。精神科の先生で、例えば「指テスト」みたいなものを作ってらして、知能の測定を、例えばキツネの形をして、これ作ってごらんって、知恵遅れの人にこれができたらIQはこれ位って、便利なテストでした。それが割と有効で、今は忘れましたが、いろんな指テストを作られるなど、非常にユニークな、実践力のある方でした。

また忘れてならないのは、長崎に「なずな園」という知的障害者施設があって、これは国の補助とか一切受けずに、自分達だけでやっておられる施設です。そこで近藤原理⁶⁾という先生が、独自の教育論というか福祉論を展開して実践しておられるのです。近藤先生が若いときに、宇部の「常盤学園」という山口県の最初の知的障害者施設の職員だったのです。お父さんは近藤益雄先生とい

い、当時私たちの知的障害者福祉実践に一つの指針を作っていたいただいた立派な方です。原理さんはその方の息子さんで、今、長崎純心大学の先生もして活躍しておられます。

そういう方もいらっしゃったし、今お名前が出ないんですが、山本さんと言われて、小学校の校長先生をしてらして、知的障害の特殊学級の担当をされた後、東洋大学かどこかに行かれた、その方も素晴らしい。

3. 先駆的であった山口の特殊教育⁷⁾

戦後、第1回目の「特殊教育研究会」⁸⁾が下関で開かれたのです。これは、全国の特殊学級関係者に呼びかけて開催されたもので、そのくらい、当時の山口は障害児教育に対して盛り上がっていました。まず下関の桜山小学校（筆者注：本村小学校の誤り？）という学校があるんですが、そこに特殊学級ができました。そして萩の奈古というところなのですが、そこにも特殊学級がありました。とくに奈古には「奈古プラン」というのがありまして、全国の一つのモデルになりました。私たちが学生時代には、その特殊教育はちょっと知られていました。

それぞれの実践の背景には九大の先生方が関わっていらっしゃいましたが、奈古にはN先生という先生がいらっしゃって、当時すごく珍しい特殊教育されていました。というのも、すごく出来る子と出来ない子を一緒にしたのです。今から思うと、どうですかね？結局あんまり長く続かなかったのですが、そこに関わったN先生がとても優秀な先生で、その時の子どもの資料を全部持っておられました。まだご健在かなあ。私がおこ（県立大学）を辞める頃、お宅をお尋ねして資料を見せてくださいと言ったら、まだ今ほど個人情報問題はない頃だったんですが、絶対に見せられないと言われたのです。「私が死んだら、全部娘に焼けと言ってある。」とおっしゃいましたね。

でも何故「奈古プラン」が潰れたかというのと、これはあくまでも私の解釈で、その先生が言われ

たのではないですが、その先生が当時組合運動にもものすごく熱心になられたのです。そして、頭のいい子と知恵遅れの子と一緒にして教育するには、人数を少なくしているわけですね。こんなことをやるのだったら、全部の教室を20人位の学級にしたらいいということで、ものすごく運動されたのです。それで当時「日教組」という強い組合のリーダーシップをおとりになった。それで、結局先生が高等学校に飛ばされたりされて、「奈古プラン」は解体したのではないかと思っています。私がおこにこの大学にいるとき、奈古小学校に行って「昔の記録はありませんか？」と聞いたら、「そんな事やってたんですか？」って、今の先生は、誰も知りませんでした。そんな歴史がありますね。

私の知る範囲では、他にも当時の山口の知的障害の教育は、非常に先駆的なことをしていました。先ほどお話しした、近藤原理さんのおられた「常磐学園」ですが、同じ宇部には「常盤公園」という公園があります。ここで学園の知恵遅れの人たちが働いたのですが、これは恐らく全国で最初に市役所が知的障害の人たちを雇用したというものです。全国大会があったとき、公園へ行くと、宇部市の人が「みんなこのように仕事を良くする」といって自慢して見せられたんですよ。そしたら、参加されていた人はみんなブーイングして、「なんであんなによく働くのに、給料が安いのか。」って、結局自慢が自慢にならなくなりましたけどね。まだそんな時代でした。知恵遅れの方はすごく賃金が低い。いまから考えると夢のような話です。

4. 「仮性精薄」のこと

その研究大会の時に、ある特殊学級の担任の先生が、子どもに自分の作った詩の朗読をさせて、自分のクラスの子どもを指導したらこれだけ伸びたと言って自慢されたのです。

実は、当時私は児童相談所に居まして、心理判定員ですから「心理テスト」をする訳です。その結果を見て、小学校で5段階評価でオール1なんていう学力の劣った子は、Yという児童養護施設に入れて、そこから特殊学級のあるS小学校に通

わせたんです。「この子は、軽度精神薄弱だから特殊学級に入れてください。」と言ってね。当時は、なかなか一般の家庭では、我が子を特殊学級に入れることを希望しないんです。だから、児童相談所から養護施設に措置するときに、知的に遅れているから特殊学級に入れてくれと言うわけです。

今ではこんな言葉は使いませんが、当時は「仮性精薄」と言って、適切な教育がなされなかったために学習能力が伸びていないと、知能検査をやってもIQ70そこそこくらいの成績しか出てこないんです。だから、児童養護施設入所とセットで特殊学級に入れたのです。そうすると、その子達の成績はどんどん伸びていくんです。担任の先生の指導も良かったのですが。その先生も、自分が指導したら子どもは伸びていく。そこで、知恵遅れの子がこんなに伸びたといって自慢されたんです。

<K>最初IQを測定したら、若干低かったが、しかし、それは「仮性精薄」つまり「環境性精薄」とも言いましたが、それまでの生育環境の条件が悪くて一見知的障害のように見えていたけれど、もともと本来の「知的障害」ではなくて、知能テストの力を発揮できなかっただけだったのですね。

<T>そうです、そうです。「仮性精薄」と言って、今は使わない言葉ですけどね。その時に、また牛島先生のエピソードなのですが、研究会で自慢した担任の先生の発表を聞かれて、牛島先生はよく児童福祉のことをご存じなので、私に「Iという施設は、児童相談所が措置するんだよね。あの子は、本当に知的障害だったの？」って言われたのです。私は「はい」と返事しました。そしたら、「それは違うでしょう。知的障害というのは、なんぼ教育してもIQは伸びないよ。だから精神薄弱（知的障害）って言うんだよ。」って言われて、「アッ。」とショックでしたね。もともと健常児だったから、丁寧な教育を受けて伸びたのは当たり前で、必ずしも知的障害児を対象とした特殊教育の成果では無かったのです。そういうエピソードが

色々あります。

さっき、里親に興味がある学生さんがおられると言われたけれど。ある子を思い出します。小学校上がる前の女の子で、かわいい女の子でした。だけども、夜尿はするし、知能検査をやってもいわゆる軽度の知恵遅れ。まあ、私のテストのやり方が悪かったのかもしれませんが、そういう子でした。ある日、その子を里子として育てたいとおっしゃる方が来られました。その時私は「あの子は知恵遅れで、オネショもあります。」と言いました。すると、その方は、一旦はあきらめてお帰りになったのです。しかし明るく日また来られて、「あなたにそう言われたけれど、やっぱり私に預けてください。」と言われたので、思い切って里子に出しました。その里親さんは、元小学校の先生をしておられた方でした。この子は、1年生の時は本当に勉強についていけませんでした。3～4年生ぐらいから、知能指数が上がっていきやすいですよ。中学校の時にはIQ90台を出していました。県立商業高校の貿易科と言いましたか、新しく出来たコースに入学し、その時知能検査をしたら、IQ110くらいになっていました。卒業後、彼女は一旦大阪の貿易会社に入りました。そうして、里親にお世話になったんで自分も児童福祉の仕事をしたいと言って、地元の児童養護施設に戻って、保母の見習いをやりながら保母試験を受けて、その後結婚して独立していきました。最近どうしているかは、音沙汰無いのですけど。（その子を「知的障害児」と判定したことは、）心理判定員としては大変なミスをしたこととなりますね。しかし、一方では現実とはそういうものだということが分かって、仕事に幅ができました。

5. GHQと山口の特殊教育

行ったり来たりして申し訳ありませんが、なぜ山口県で特殊教育が非常に盛んだったのかということに、ある程度たどり着いたんですが、しかしその先は見えてないんです。

日本が戦争に負けた後、昭和20年の後半からアメリカの兵隊が駐留していました。山口県は、さ

らに色々な国が駐留したのですよ。山口市はアメリカ兵だったのですが、例えば私の住んでいる府はオーストラリアの人たち、宇部はニュージーランド、そういう状態です。その時のGHQの教育の担当の人が、アメリカで特殊教育の勉強をしていたのではないかとされているんです。名前は、探せば出てくると思いますが、非常に若い20代の方だったそうで、その方がそういう特殊教育の実際について盛んに指導されたと聞いています。

その方の指導を受けたという現場の先生がいらっしゃったんですが、その方と特殊教育の話をする、みんな日教組（日本教職員組合）につながっていくんです。当時、日教組は厳しい左翼的な活動をしていまして、学校の管理とか自分たちの権利を守るということにスクラムを組んで大変もめました。そのために、自分が日教組の頃にしたことを恥じて、当時の特殊教育のことをおっしゃらなかったように思います。

<K>GHQの指導の下で特殊教育を一生懸命なされたから、あんまり話したくないのですか？

<T>いいえ。皆さん、組合活動に熱心だったために、教員として挫折されたんですよ。左遷させられるのです。例えば、中学校の先生であった人をわざと高等学校の先生にするわけです。高等学校の教員組合は「高教組」という独自の組合があるので、「日教組」が少ない。「高教組」の運動は、「日教組」ほど激しいものじゃなかったからです。だから、何かそういう挫折につながっていったのではないかと、これは私の解釈ですけれど。

6. 足聴機の実験から児童福祉へ

私は昭和29年に広島大学を出て、山口県の教員に採用されました。高等学校の教員としてです。というのは、私たちの頃には、大学の心理系学部の就職先は大学とか専門学校の先生になる以外はありませんでした。でも、教育系の学部を卒業すると、就職はいっぱいありました。だから、大学では心理系でも一応教員免許状を取るようにと指導されました。そして、みんな英語か、当時広島

大学は統計学が強かったので数学を勉強したいというのがいて、英語か数学の教員免許を取ったものです。しかし、私は言葉の問題をやりたかったので、言語学なんかの講義を取っていました。実は小学校教諭の免許をとりたかったんですが単位が取れなくて、結局、国語の高等学校教諭免許をとりました。それで、家庭の事情があって山口県に帰ってきて、国語の教員として採用されたんです。

採用の年には、山口陶の現在の教育センターの所に聾学校がありまして、そこに赴任しました。その校長先生が、足で聴く「足聴機」というイナゲ（奇妙な）な、ろうの子に足の裏から振動を与えて言葉の勉強をさせるという機械を発明しておられました。簡単に言えば、スピーカーの裏に板を載せて、マイクを通して振動を伝えるというものです。

何でそういうことをしたかということ、通常は手のバイブレーターという機械があって、先生の言葉をそれを使って「振動」に変えて伝えていたのです。それからしばらくするとテレビが出ましたから、いわゆる映像で音の伝達をする、例えば50音を全部「音声波」に変えて伝達するというのも出ましたけど。それらは余り教育の場では役に立ちませんで、すぐ消えました。それで、当時は未だ手のバイブレーターが使われていたんですが、あまり役に立ちませんでした。そこで、その校長先生がお考えになったのは、足の裏からバイブレーション刺激を与えたら良いのではないかと。つまり授業中、足は何もしてないので、足をバイブレーターに載せて勉強すると手も使えるじゃないかと。

その「足聴機」は大変なブームになりました。私は聾学校に1年半くらい居たのかな、それがちょうど真っ盛りの頃に着任したんです。

その校長先生、もう亡くなりましたけれど、その後ここ（山口女子大学）の附属幼稚園の初代の園長先生をされたT先生という先生です。知覚の研究者で、振動感覚の論文をたくさん集めていらっちゃって、それに私の名前が出てたりしたの

で、すぐに私は高等学校に着任するのではなくて、教育研究所というところの연구원として聾学校に派遣されることになりました。

そこで、足聴機関連の研究をしたのはいいのですが、(私の実験結果は) 校長先生が言われることと全部逆の結果が出ましてね。私の方が正しい。例えば、校長先生は、左と右といたら、右は鉛筆持つから「左が過敏である」と言った方が良いと言うわけです。それで実際に左が過敏だというデータが出ているのですが、私が実験したら右と言う結果になるんです。私がそこに行く前は、若い女の先生がその実験をやってらして、(先生の仮説に) 都合の良い実験結果が出るまで、先生がお許しにならなかったのです。それでしまいには、自然に左の方を強くたたくという形に(子どもが) 訓練されてしまって、そういう実験結果になっていた。しかし、私は違う結果を出すので、それで大変叱られました。

高松宮妃殿下が山口に来られたときも、わざわざ「足聴機」を見学に来られました。世界各国から「足聴機」をわけてくれと、本当に各国から毎日のようにたくさん問い合わせが来ていました。国会にも行きました。そのくらい大変に、特殊教育の中で山口県は全国の話題になりました。ただ校長先生は良いて言っていましたけれど、結局は何でもなかったんです。もちろん、全国の聾学校のベテランから、「そんなバカなことがあるか」という言い方で、ゴウゴウの非難を受けました。

私はそういうことで、次第に「障害児の福祉」ということに首をつっこんでいくことになりました。そうすると、今は結構心理学の幅は広がりましたが、当時の心理学というのは実験心理学で、応用心理学はほとんどありませんでしたから、幅の広い領域を勉強しなくてはいけないということで「日本社会福祉学会」に入りました。「社会福祉学会」は長いですね、40年になりますか。そんな形で、社会福祉と臨床心理学と両股をかけた形になりました。

この学部(山口県立大学社会福祉学部)を作るときに、大学で唯一の社会福祉学会員でした。そ

れで何やかんやで知り合いの方を大学に紹介するという形で学部がスタートしました。

7. 「舵子事件」のこと

この時期の児童福祉の分野で歴史に残るのはいずれ、ある事件が起きたことです。山口県の瀬戸内海のN島という離れ小島にAという児童養護施設があるのですが、なんでそんな島に作ったかという、昔はあの辺りには、「舵子」という働く子ども達がいたんです。その島の周辺は、島と島の中の潮の流れが速くて、鯛の一本釣りの漁場なのですが、「舵子」というのは、船が潮に流されないように舵をとる役目の子どもです。「舵子」になるのは、地元の漁師の子供はあまりやらないで、みんな広島とか松山から多く来ると。その辺で、いわゆる親が育てられない子どもで、特に表に出せない子、病気で育てられないとかいうのはまだ良いのですが、いわゆる人に言えないような男と女の間関係になって子どもが産まれたりした場合なんか、そのような子にお金をつけて島に「舵子」として預けていたんです。それが、戦後児童福祉法が出来たときに、児童虐待という形でマスコミがとりあげて、「怒りの孤島」という映画にもなりました。そういう、山口県の児童福祉の汚点になるような事件が起きました。

私が児童相談所に入ったときにはもう終焉しておりましたけれど。

それがきっかけで島に児童養護施設ができたのです。現在も養護施設があると思います。東野さんという方ですが、その方のご兄弟が、Aという施設を経営してらっしゃいますが、まだ生き証人として、お話を語ることのできる人がいらっしゃる。また、昔はそういったことを触れるということ自体タブーだったわけですが、今は少しはお話しして下さるんじゃないですかね。

<K> 当時島の方は、全国的に叩かれたみたいですね。今でいうと児童虐待、児童を酷使する奴隷の島だと。だから、未だに島の方はその事件がトラウマみたいになっておられるようですね。

<T> そうです。みんなそれぞれに、そういう子

を雇っていましたからね。鯛というのは昔も高い魚でしたから、一本釣りという形で釣っていましたが。今はもうエンジンの着いた船でやっていますから、「舵子」なんて要らなくなりましたが…。

<K>東野さん自身が網元の息子さんだったけれども、地域の汚名を挽回するために児童施設を作られたんですよね。

<T>そうです。もう、風化していく危機にありますね。丁度私は、その後始末の頃でしたから大変みたいでした。私は直接関係は無いんですが、所長さんとか副主任さんとかがね。

8. 昭和30年代の児童問題

<K>現在の児童相談所では障害相談が一番多いようですが、当時は、どんなお子さんの相談が多かったですか？

<T>養護の相談が多かったですね。知的障害はやっぱり数が少ないから。でも決して少なくはなかった。養護相談が一番多かったんじゃないですか。私が入りましてから教育相談がパーっと増えた。

これは、点数で表さないといけないというのがあって、附属小学校の入試でWISC⁹⁾の知能検査をやるということで、児童相談所に行ったら事前に練習させてくれるということが広まり、附属を受けに行く人は皆事前に相談所に来て検査を受けるようになりました。それで教育相談が増えたと思います。

けれど基本的には、養護の相談が多かったと思いますよ。今はダメですけど、山口県は戦争中・戦後は結構産業の盛んな県でした。宇部は宇部炭坑があって、非常に栄えていました。美祢市には無煙炭の炭坑がありましたし、小野田にも炭坑がありました。これらの石炭関連産業が燃料革命で変わっていくんですね。炭坑で働く労働者の中には、もともと貧しくていろんな問題を持っている人たちが一杯いました。宇部辺りから来る「教護児」といいますかね、盗みをする子どもとか、あるいは非行・犯罪をする子ども達、そういう人たちはたくさんいました。

燃料革命で、どんどん炭坑が潰れていくんです。すると、そういう人たちは行くところがないのです。当時「蒸発」と言う言葉がありました。離婚して、奥さんが子どもを置いてどっかに逃げていくという。男がいなくなるのじゃないですよ。主に女がいなくなるのを「蒸発」といった。そういうのが全部、京阪神とか広島とか北九州・福岡の歓楽街に女性の人は流れていく。仕事のない父親と子ども達は残される。子どもは食べるもののために盗みをするという、というのが典型的な状態ですね。

9. 当時の児童相談所の職員のこと

<K>当時はまさに貧困問題が中心課題だったのですね。さて、先生がお勤めになっておられた頃は、中央児相一カ所ですか？もう四カ所でしたか？

<T>四カ所です。もう私が入ったときには、山口中央、下関、徳山、今の周南ですね、それと萩四カ所がありました。もちろん規模は非常に小さかったんですが、でも私が入った頃には、それぞれの児童相談所が一時保護所を持っていました。私が入ってからしばらくしてから、歴史的にははっきりしませんが、一時保護所は山口中央1カ所になりました。

車の時代になりましたから、下関から二時間くらいあれば連れてこられますから、そういう時代になりました。

<K>その当時の児童相談所の、児童福祉担当者とかケースワーカーとかそういった方達は、どういった感じでしたか？

<T>言葉が皆さんに分かりにくいかもしれませんが、「引揚者」と言う言葉があります。戦前に満州とか朝鮮とかの旧植民地で働いていた官公庁の人が帰ってきて就職されるのですが、本庁という県庁のお城の中にはなかなか入れないんですよ。それで、そういうキャリアのある人たちが、みんな児童相談所のような出先のところで二度目の職に就いた。

<K>外地で公務員だった人が多かったんです

か？

<T>そうです。だから能力高い人が多かったですよ、素晴らしい方が。例えば、児童相談所で収容した女の子を迎えに来て連れ出そうとした男が居ましてね、本当は鍵のかかる部屋に子ども入れてはいけないんですが、一時保護所に鍵のかかる部屋が一つありまして、そこから連れ出そうとしたのですが、よう連れ出せなかったんです。それでその仕返しに、当直をしていた職員を刺身包丁で刺して命を落とすという悲惨な事件が起きました。

<K>親が取り戻しに来たのですか？

<T>いいえ、女の子の中学のボーイフレンドです。今は、もう出所したと聞いているんですけど、そういう大きな事件がありました。その頃、中央児童相談所は、日赤の側の八坂神社の河村写真館の隣にありました。一番最初にできた児童相談所の仮の事務所は、三和町の方にあっただと聞いていますが、私の入った時には八坂神社の境内でした。

これにはエピソードがありまして、当時の労働民生部長が新しく部長になったからと、各出先の視察に来られたんです。その人は、まあ「話せる人」でした。井上という部長でしたけれど、若い私をつかまえて、何か要望があるかと聞かれるので、私は「児童相談所を立て替えてください」と言ったんですよ。「何故か？」と問われるので、当時のエピソードを話しました。それは、神社の鳥居をくぐって児童相談所に入ってくるので、相談所に来た人はみんな、ここを八坂神社の一角と考えているわけですよ。ある時、子どもが夜尿するという相談があって、いろいろ話を聞くと知恵遅れのような感じがしたから、ちょっと知能検査をしようとして簡単な検査をしたんです。小1時間くらい検査をやって、夜尿についてのありきたりのことを言ったんです。そうしたらそのお婆さんがキョトンとして、「まだお祓いはしてもらえませんの？」って。神社に来たと思っていて、護符を頂くとありがたいと言うんです。今でも出しておられると思いますが、近くの野田神社がそういう「オネショのお札」を出して祈祷をしてらっしゃっ

たんで、そこと間違えて来られてる。そういうエピソードを話して、大笑いになりました。「ようわかった」と。私は、後々ずっとその部長さんに可愛がられました。その直後にその職員が殺されるという事件があって、今の児童相談所に移るんです。

亡くなられたのは中山さんと言う方なんです。今の東京外国語大学のロシア学科を出て満州で高官をしてらした、豪快な人でした。酒を浴びるほど飲まれる。そんな方がいらっしゃった。

私も、年配の方には恵まれていました。いわゆる児童福祉司さんという職には、元校長とかそういう方ばかりでした。当時「パージ」¹⁰⁾と言って戦争中に国粹主義的な教育をしていた人は、全部教職に就けないんです。他に私と一緒にやっていた児童福祉司さんは福田初人さんという人ですが、後に小野田から県議員になられ、長く県議員をされ、幼稚園も経営してらっしゃったと思いますが、この方も立派な方でした。本当にいろんなことを教わりました。

それから、山口県の児童福祉あるいは児童相談所に影響を与えたかたで、山元公道という方がおられます。東大のインド哲学を出られ、戦争中から内務省という厚生省の前身で福祉の担当官をされていた。この方は、新しい児童福祉法の草案を作った担当者の一人だったと聞いています。家が、宇部市の小野と言うところのお寺さんのご長男ですから、家を継ぐために山口県にお帰りになった。そして山口県の職員になられた。そして本来なら国の役人ですから本庁のほうに入ってくるんですが、どういうわけか下関の児童相談所に着任されました。この方が山口の児童福祉についての的確な指導をされました。

「あいりんピック」というのがあるんですが、あれを名づけたのが山元さんです。私たちみんな文句言って、「あいりんピック」なんて何だと。日本語と英語を一緒にしたんじゃないか、格好悪いって言っていたんですが、今はそれが普通になりましたね。また、里親活動をものすごく熱心に推進されて、当時の山口は、全国でも里親の人口

比はトップクラスだったんです。だけど、今は里親さんはほとんどいないんじゃないですか？ とにかく熱心でしたよ。

10. カウンセリングとの出会い

<K>今考えると、本当に多彩な人材がおられたと言うことですね。昭和20年から30年という、まだ戦後の立ち直りの時期で、児童福祉の熱が高まる頃ですよ。そういう熱気というか気運を、現場の職員の人たちみんなが共有していたという感じはありましたか？

<T>今先生からそう言われると、「ありました」と格好良く言いたいんですがね、でもそれどころではないんで、毎日の仕事に追われていましたから。まあ、所長さんが立派な方でしたから、とにかく所長に聞けばすぐ答えてくれると。

<K>かなり権威がある、というか、見識があって、こうしなさいという方針を明確に出してくださった？

<T>それが、私たち若い者に言いたいことを言わして、措置会議などはものすごく長くやるんです。特に私なんかやーやー言うもんですからね。若い私は、いわゆる教科書・参考書に書いてあるようなことを言うけど、児童福祉司さんは元校長で経験があるから、必然的に経験と理論がぶつかると。

例えば、私はそのころから「サイモンの親子関係テスト」というのが一番好きなテストなんです。それしか使いようがなかったというか、未だにそれを使いますが、そんなのをやっていて結果が出るわけです。この親はこうだと言ったら、児童福祉司さんは実際に親を見てらっしゃるので、そんな親じゃないよと言われるわけです。テストを適当にやってるんじゃないかって言われたりして。けんか腰になって「もう一回やります。」ってやったら、2度目は全然逆の結果が出たりして…。子どもはテストでいい加減なことを言ってるわけですよ。最初はお母さん嫌いって言っているけど、一時保護所に1週間くらいいたらお母さん恋しくなる。そのときに愕然としましたね。こんなの（テ

スト）を当てにして良いのかと。

そのときに、友田不二男¹¹⁾という日本のカウンセリングの権威で、ロジャーズを日本に持ち込まれた方ですが、その方の本を読むと、心理テストは要らないと書かれてあって、テストなど当てにならない、テストで判断してはいけないと書いてあるんです。最初は「なんてことを言うんだ。」と思いました。広島大学はテスト万能主義でしたからね。それで「先生の本を読んで気に入らん。」と手紙を出したら、先生が「じゃあ勉強にいらっしゃい。」と。

それで、所長さんに「心理テストに自信なくなりました。本読んだらこんなことが書いてありました、そこに勉強しに行きたいんですがいいですか。」と言ったら「はい、行ってらっしゃい。」と。その代わり出張旅費はくれませんでしたけれどね。

それで、友田先生の第1回のカウンセリングの研究会を、茨城のキリスト教大学でやったんです。ローガン J.ファックスという茨城キリスト教大学の学長さん、これは当時30歳代の方でしたけれどその方が副リーダーになって、全国から20人くらいが最初に集まりました。そして、ロジャーズのいわゆる「非指示的カウンセリング」という言葉で勉強しました。それから私は「カウンセリング」と言う道を歩むことになったのです。

それからずっと、その20人が私の友達で、何か分からないときにはその友達に連絡してやってきました。だから、それまでは、児童相談所で「診断主義」というんですかね、テストの結果で判断するというやり方をしてきたんですが、それから「カウンセリング」中心で、子どもと徹底的に話し合うというふうになりました。

子どもがまた良いこと言うんですよ。東京から帰って最初に、ある子どもと30分くらい面接しましたが、その子の家では炭を売っているのですが、炭の代金から時々買い食いするんです。義理の母親に虐待されているんですが、お母さんが、例えばその子が200円の買い食いをしたら、米に換算して1升分のご飯を食べさせない。話を聴く

と、母親の悪口をばーっと言うんですよ、涙を出してね。しかし最後に、「先生、お母ちゃんの悪口言ったけれども、本当は僕が悪いぞ。今度炭を買いにきて、そのお金で買い食いせんから、家に帰して。」「そう、帰りたい?」「うん。」「絶対せんか?」「うん。」その子は措置会議の時に、親が虐待するというので児童養護施設に入れるということにしていたのですが、幸いにも当時施設はいっぱいで、一時保護所に待機させていたのですね。そこで、まあしばらく児童福祉司さんに監督してもらおう、というということになりました。その後二度と彼は児童相談所に来ませんでした。今はある町で、従業員が10人か20人いる水道工事会社の社長さんです。未だに交際しています。

<K>最近は何援助技術のなかで、アセスメント、エバリュエーション、エビデンスなど評価・効果測定ということが強調されてきていますね。

<T>この前も指導をしている児童養護施設で、ある子どもの問題を見て、1年生の時と5年生になった時と同じテストの結果が出ましたというので、私は怒りました。学校の成績を調べた方がいいといったら、学校へ行行ってちゃんとやれるようになってるんですよ。「いけないなあ。」と思いました。

テストに興味のある人に、「テストが全く当てになりませんよ。」と言っているのではなくて、テストは「その結果を見分ける力が要る」ということです。私なんか、今でも絶対「テストの結果はこうでした。」とそのまますクライアントに言いません。言う場合もありますけれど、その場合は「不安障害」だけです。便利がいいんですよ。そのテストちょっとやると、みんな不安障害になる。だけど「不安障害」の人は面白いことに、薬を飲んだら依存するようになるからと不安がって治療しないことが多いのです。それでテストをして「ホラあなたは不安障害でしょ。」と言って、「不安障害にはこの薬がよく効くって書いてあるんだけど、先生に言って薬をもらおう。」って言って飲ませる。そういう時には、テストの結果をあえて知らせます。そういう風に使います。

11. ノーマライゼーションとの出会い～ヨーロッパ研修で感じたこと～

私たちが児童相談をやっているのは、当時は知恵遅れの施設が少なかったことなんです。だから、盛んに知恵遅れの施設を作ってくれ作ってくれと言って、最初の頃の県内の知的障害児の施設は、ほとんど私がブレインになって作りました。県では一応唯一の技術員ですから、どうなんだといういろいろ聞かれて、資料をさし上げたり、そういうかたちでした。6棟ですよ。私は自閉症に興味を持っていましたから、特に「ひらきの里」ですね、あそこは力を入れました。

施設作りを一生懸命やっているころ、40～50年くらい前ですか、たまたま新聞記者が若い県庁マンについての連続インタビュー記事を企画したんです。それで、相談所では私が選ばれました。その時、記者が「あなたの夢は?」と聞くから、「外国の福祉施設を見たい。特に障害児とか肢体不自由児がどんな風に見えるか見たい。」と言ったら、それをそのまま書いたのです。そうしたら、それをさっき言った、以前私が中央児相を作り替えてくれと訴えた部長さんが見て、「これをヨーロッパに行かしてやれ。」と言う話になって、私が山口県の海外研修の第1号になりました。

何しろお金がなかったんで、大変苦労しました。でも県が50万円くらい出してくれました。実際には100万円くらいかかったんですが。今から思うとね、1ドルが450円くらいの感じでした。あんまり外国の経験も知識もありませんから、5カ国くらいずつ行ったんですが、国境を越えるたびにお金を替えないといけない。両替すると1割くらい手数料を取られるんですよ。小銭は替えてくれないので一杯残ってしまって、空港で鉛ばかり買っていました。トランク半分くらい鉛を買って帰りました。

<K>何年ころですか?

<T>昭和46年かな、その頃、判定課長をしていました。そこで「ノーマライゼーション」と言う言葉に出会うんです。そういうかすかな言葉はあったけれど、私が行った時にはまだ「ノーマラ

イゼーション」は実現してなくて、オランダの国立施設なんかも、巨大な施設が48あったのですが、あれは今どうなっているでしょうね。変わってないと思いますけどね。

たまたま下関の長府にカトリックの教会がやっておられる「暁の星」という施設があって、そのシスターに紹介していただいて、向こうの同系列の教会を頼って行きました。ちゃんと日本語をしゃべって、今で言うボランティアですね、色々お世話してくださったんです。言葉もあまり出来ないんですが、日本で勉強して行きました。

一番ショックを受けたのは、私は臨床心理士ですから、例えば研究室とか治療室とか実験室とか、隔離した模範的な部屋があって、そこで治療するという考え方があるじゃないですか。それが、フランスに行った時、ナポレオンの別邸だったという、ものすごく豪華で、ものすごく広い、木も大きく茂った素直な施設がありました。そこに行ったら、すごく太った、それは園長先生でしたが、その人が、階段を上ったり降りたりしてらっしゃるんですよ。子どもが10人くらいワーッと集まってね。「何をしてらっしゃるのですか？」と言ったら、「オキュペーション・セラピー！」機能訓練なんですって。そう言えば、そうかな、すごいなあと思いました。セラピーと言っても大したことではないのです。自然にやっておられた。

そのシスターはいわゆる知的障害児を世話する保母さんですが、施設の「準職員」なんです。午前中は施設の子どもの世話をして、午後勉強する。丁度日本の准看護学校と一緒にですね。本当に勉強できるでしょうね。普段から子どもと接して、並行して知識を貰うのですから。あのシステムもすごいなと。

だいたい看護系はドイツ系ですから、そういうのがあって、准看護学校というのはああいうシステムになったのだらうと思いました。私はここを退職してから、下関の介護福祉士養成の福祉専門学校校長をこの3月までやっていました。ホントにしみじみそう思います。学生から授業料を取らずに、施設で準職員として働きながらやって

いって、そして給料出して欲しいなど。介護福祉士になる人はお金は要らんと。今は奨学金にしても返還しろとかいろんな問題があります。何であんなにしてくれないのかなあと、すごく思います。

それからもう一つ、フランスの肢体不自由児施設に行ったときに、脳性麻痺で顔がグチャグチャになった方がお化粧してもらっているんです。それも、男性の職員が口紅塗って、おしろい塗って、私らに向かって「きれいになっただろう！」って。その障害者の人が、嬉しそうな顔をして鏡を見たり、私たちを見て喜んでるんですよ。「これは喜ぶますよ。」といわれて、それから私もメイクについてすごく関心を持ちました。

私のところで、介護士養成の特別講義でメイクの授業をさせていました。「男の子がメイクをやったら合わんなあ」と、ちょっと抵抗があるんですが、しかし、ものすごく大切だと思いますよ。私もカウンセリングしていますけれど、本当は化粧で救える人はたくさんいるんじゃないですかね。最近では「メイクセラピー」という領域もありますよ。学問として立派になっています。でも施設ではまだそんなことはしないですね。いろんな領域は広いです。

やはり外国に行って初めて私は「ノーマライゼーション」という言葉をはっきり意識して帰るんですよ。それまで「施設を作る、施設を作る」といってましたからね。ただ大型の施設は作るまい、小さな施設を作ろう、親が尋ねていくのに近い方がいいから、とは思っていてやっていました。コロニーのようなものは作るまいとね。丁度そのころの担当の部長さんが佐々木重行さんで、一緒にね。しかし、「施設は要らん」ということになっていて、その話をヨーロッパから帰ってしたら、知恵遅れの親たちから総スカンを食いましたよ。そういうことを言って、親が死んだらどうするのか、とそういうことを言われて…。

12. 絶対福祉と相対福祉

<K>日本では昭和30~40年代と言うと、糸賀一雄さんが注目されていましたが、何か影響を

受けられたことはありますか？

彼は、日本のノーマライゼーションの提唱者であったとも言われますが。

<T>私にとっては糸賀さんの考え方は、初めは「何でこんなこと言うの？」って感じでしたが、段々広まりましたね。糸賀さんは保母さんの研究会の講演の途中で倒られたんですが、ほんと素晴らしい方です。琵琶湖学園などの話を聞いて「うらやましいなあ」と、あんな子どもをちゃんと収容する施設を作るなんてすごい。その後、重度心身障害児施設が山口県にもできました。

ただ県内のある障害児施設の入り口に「この子らに世の光を」と書いてあるんです。それを見て、これは間違っていますよ「この子らを世の光に」ですよって園長にいったんです。「間違っとるかね？」園長がおっしゃったんですが、事務長さんが教員上がりの人で、「間違っとらん、この暗闇に光を貰わにゃあいけん」と消されませんでしたね。長いこと、行く度に、あれを変えましょうよと説明したんですが、なかなかね。

<K>当時は相談にみえた極めて重度のお子さんはどう対処されていたのですか？行き場所がないと？

<T>幸いなことに、あんまりそのことで苦労していません。実は、重症児のほとんどは家庭内に隠してました。だから、重症身障児施設ができた時は、作ったのは良いが入り手がなかった。そこで僕ら相談所の職員が手分けして、噂を聞いて、あそここういう子がいると、今ほど厳しくないから、「そういうお子さんいませんか？」と言って、田舎のお店で聞いたら、「あそこに居ってよ。」って、そういう調子で探すのですよ。そして訪ねたら、怒られましたよ。「そんなこと誰から聞いたか。」「県から来た。」「何しに来た。」って、塩を撒かれんばかりでした。それで、「こうこう、こういう施設があって、施設にお預かりします。ぜひ見学にいらっしやい。」一時抵抗があったのですが、一旦入所し始めたたら、次は私も私もってことになりました。

そのころはすごくエピソードがありましたね。

お母さんが、家の一番薄暗い、納戸というんでしょうかね、部屋の締め切ったところに障害児をずっと寝かせていたんですよ。だから真っ白でモヤシのような障害児もいました。あるお母さんが、初めのころはお粥を炊いたりしていたが、終いのころは自分で嚙んで、それを口移しで食べさせて、それだから生きられたのかもしれないけど。そんなのがあってね、お母さんが「絶対施設には入れん。この子が生きがいです。」とおっしゃって…。

その頃、私はこんなことを、ある雑誌に書いたんです。「<絶対福祉>と<相対福祉>ということを考えてみたい、立派な施設があって、客観的に本当に子どものためを考えてくれる施設が<絶対>いいのか。相対福祉というかたちで、どんなに貧しくても、その子が親の愛情のもとに暮らせるのが子どもの幸せなんじゃないか、どっちがいいのか分からん。」ということを書きました。今から思うと恥ずかしいんですが。所長が原稿を書いてくれて言ったから、所長の名前で出したんですが、実は私が書いたんです。

でも皆さんに言いづらいのですが、二度目にその家に行ったら、その献身的なお母さんが言うには、「お父さんが和歌山県の飯場で働いていて女ができた。それで、その子を抱えて和歌山にまで行って、もう離婚するから、この子もその女性に面倒見てもらえ、と飯場にそのまま放り投げて置いて帰ってきた。」と。こんな大きな10歳くらいの子でした。ホントに頭が下がるようなお母さんだったのですが。二度目に行ったら、そう言って、子どもを捨ててサバサバとしていてびっくりしました。そんな思い出もあります。

<K>障害児の親御さんには、生きがいですとってどっぷり抱え込むタイプと、全く受け入れられないという拒絶してしまうタイプと両極ありますね。

<T>はい、それは両方あったと思いますけどね、これも今でも夢に見るような、辛い思い出ですけど、ある男性が児童相談所に知恵遅れの子を抱えて来られたんですよ。女房が蒸発して、この子

を面倒見ていけない。今から都会に行って仕事を探そう。それまで預かってくれ。その頃知恵遅れの担当は私ですから「やあ、知恵遅れの施設はいっぱいあります。」「あなたはどちらですか?」「出雲市です。」「では、出雲に児童相談所があるからそちらに相談に行ってください。」と言いました。そして黙ってその子の手をつないで帰られました。翌朝、相談所に行ってみたら、上司から、おまえあの人に何を言ったのか?と問われるんです。新聞に、JRの鉄橋からその子を突き落としたという記事が出ていると。不思議にその子はかすり傷も負わずに無事で、翌朝警察から児童相談所に通報がありました。あれはショックでした。

同じように、炭鉱の知恵遅れの子が集団輪姦をうけて命を落とすという事件がありました。担当の児童福祉司さんに、入所は夏休み明けまで待ってくださいと言っていたら、丁度盆の頃その事件が起きて、「わしが施設に入れろといったのに、おまえが入れてくれなかったから。」と言われました。これも痛かったですね、当時は一生懸命でしたが。その頃から「福祉ばら撒き時代」に入りましたから、その後どんどん福祉施設ができましたが、まだまだ施設が足らなかった時期の非常に辛い思い出です。

13. 学生時代のこと

<K>今日は、学生さんもお話を聞かせていただいているのですが、学生時代の頃のことを少しお話いただけますか?そもそも心理学に興味を持れたのはいつ頃からですか?

<T>14歳ですね、旧制中学3年生でした。その後私は一旦、山口師範学校(のちの山口大学)に入ったのです。師範学校に橋本先生という若い先生がおられて、何とはなしに心理学が好きになりました。その先生は教育評価がご専門で、後に横浜の大学に行って、教育評価の第一人者となりました。その先生の人柄に惹かれたのでしょうか。

ただ師範学校で一ついけないのが、音楽だった。師範学校はバイエルの99番ですかね、それが1年生の終了単位だったんです。ぜんぜん練習してい

なかったし、児童文化部というのがあって人形劇のサークルに入っていて、仲間がみんな音楽の得意な人が多かったから、そのうち試験前にやるかってなめてました。音楽の先生はピアノとコールユーブンゲンも担当してらしたから、譜面に全部カナを付けて試験を受けたら、ヤマが外れとったのでしょ、先生に譜面を持って来いといわれて、お怒られました。小学校の教師をやるものが、音楽ができなければ立派な教師にはなれない、と言われたんです。それに反発したんです。子どもの心理をやれば、音楽などやらなくても、手が叩ければ教師になれると。それで、もともと心理学に興味がありましたので、山大(師範学校が1年で切り替わった)の1回生を済ませてから2年生に編入できるときいて、広島に行ったんです。

こんなこと自分の口で言うのは恥ずかしいんですが、語学も戦争中ですからね、1年生の時に英語を習っただけで、2年3年と語学は無かったですよ。当時は「陸軍幼年学校」といって兵隊さんの学校への進学を希望しておったから、英語の時間はぜんぶそっちの補習の時間になりました。だから全然英語はやってませんでした。で、師範学校に入っても英語の授業はありません。山大に入ってから1年だけしかやってない。数学は得意でしたから良かったんですが、語学というのは駄目。ただ、そのころは適性検査、つまりメンタルテストみたいなものがあったんです。その点と学科試験の点併せて合否を決めたので、教科は駄目だったと思いますよ。適性検査は山口で受けた中でトップでした。それで入れてもらえたんじゃないでしょうか。

入ったのは、心理学教室で、当時12、3人しかいませんでした。昔、旧制の広島高等師範学校というのがあったんです。そこも優秀な人たちがいて、そこから広島文理大に進むのですよ。広島高師で数学をやっていた人が心理学に興味を持ったからと心理学教室に入ったという言い方をします。広島大学の教育学部では、心理学科と教育学科というのが双璧でした。

主流はドイツ流の心理学で、私たちの一番尊敬する先生は小林清とって、小林知能検査を作られた方ですが、因子分析という技法を日本に導入されました。だから、いまから思えば嘘みたいな話ですけど、私たち学生のころは、タイパーという計算機があるんです。それを使って因数分析で一つの結果をだすのに1週間くらいかかるんです。何をしていたんかという感じでしたね。

14. 大学生と浮浪児と

<K>昭和20年代の学生生活はいかがでしたか？
<T>山口師範学校の学生だった時に、「学生援助同盟」といういわゆるボランティア活動がありました。各専門学校の学生が、下関の駅前で浮浪児を見つけて児童相談所に連れて行く仕事をしていました。多かったですよ。戦後5～6年経ってもでも、たくさんいましたよ。そして広島でも、広島駅前から同じように広島児童相談所に渡す。相談所に、一時保護所ができたので、そこに連れてくるわけです。だけど、連れてきてもすぐ逃げるんです。

<K>そういった子ども達とのつきあいはいかがでしたか？お兄さん、お姉さんという感じでしたか？まだ10代ですよのね。

<T>どうですかね。今のお答えで、どういう言葉を選んだらいいんでしょうかね。彼らはものすごく世渡りに長けているというか、僕らはなめられているような感じです。

こんなことがありました。山口の駅から浮浪児が出てこ年から迎えに来いというので、小郡まで山口線で行くわけですよ。見たら人懐こそうな顔で、「おまえ、何しよったん？」と言ったら「スリやとった。親方にスリ仕込まれてやとった。」「上手か？」と聞いたら、「うん上手よ。」って。ポケットに財布を入れていましたから「じゃあ、山口駅に行くまで30分くらいかかる。それまでに俺の財布を盗ってみろ。」と言うと、「世話ないよ。」って言うんです。山口の駅に着いたら、財布はあるじゃないですか。「それみろ、盗ると言っって、よう盗らんかったじゃないか。」と悪口

を言いながら立ち上がったら、私のズボンがストンと落ちたのです。バンドが抜かれていた。それで慌ててズボンを上げるときに財布をすられた。これには感心しました。

背中にむちゃくちゃな切り傷がありました。リンチされたんだって言ってました。それで、全国を無賃乗車したと。面白かったですよ、その子の話は。まだ小学校上がる前の子が、どこでも無賃乗車するんですよ。「おまえ、どうやって乗るの？」と聞いたら、「世話ないよ。前におってのおばさんの着物の裾を持って付いて行くんだ。そしたらみんな通してくれる。」そういうことを誰が教えたのですかね。それで全国を無賃乗車する。そして適当に、山口なら山口の町を覗いて歩こうとしたら、捕まるわけですよ。捕まったら児童相談所に送られるわけです。児童相談所では、偽名を使ったりして、調べてやっと本名が分かったと思ったら、また無断でそこからいなくなるんです。

でも、のんびりした時代でした。朝起きてみたら、一時保護所に40人くらいいた子が全員いなくなっていた。担当の当直が一人、それと炊事のおばさんがいた。当直が寝とったら、「先生、誰も子がおらんよ。」そこで、そこいら中、自転車で探しまわるんですよ。そんなこともありました。所長に叱られるかなと思って、昨晚全員逃げましたと報告すると、「そうか、ご苦労さん。」そんな時代でした。誰も責任を問いませんでした。

15. 遅しき浮浪児たち

<K>そういうのが落ち着いた頃というのは、いつ頃ですか？先生が正式に勤められたころにはそういう浮浪児とかはいなかったですか？

<T>いいえ、私が児童相談所にいるころにも全国に浮浪児がいましたよ。浮浪していました。その頃の子どもとは未だにお付き合いしていますよ。楽しいですよ。

例えば、親と一緒に生活していて親がやかましいから浮浪生活をして、よそへ行って、それこそ里子になって、成人式までそこに住んで、結婚するから戸籍が要るって。浮浪先で、児童相談所か

ら里子に行って、農業など手伝って暮らして、結婚話があるから戸籍が要るから探してくれと。戦災孤児という呼び方はあまりしませんで「浮浪児」と呼んでました。

<K>じゃあ、家庭崩壊とか、どさくさにまぎれてとか、今のストリートチルドレンみたいに自分から家庭を飛び出てきたということだったのですか？

<T>ええ。だから意欲はありましたよ、みんな。素晴らしい子どもでした。例えば、八坂神社という神社があるんですけど、雪の降る日に何人か逃げましたというので、探しに行くんですよ、一応ね。探しに行ったら、八坂神社の境内に6～7人くらいが、こんなに雪が降っているのにゴザ1枚かけただけで寝ていました。野宿しているのです。それくらい遅しかった。

今のインテルサットの下の河原で農家の人が、子どもが5～6人いて煙が出よるから危ないからと、警察に通報したら、おそらく児童相談所の子どもだろうということで、警察から私どものところにきました。彼らは、近所の鶏を盗って、羽をむしって、藁で焼いて料理していました。それくらい遅しかった。その頃の子は、本当に遅かったです。

<K>昭和30年頃でしたら、児童相談所や施設に行ったらご飯が食べられるし、お布団に寝られますよね。それでも、外の方が良かったんですかね。
<T>それは、自由だから。やっぱり、施設の生活は厳しかったんじゃないですか、子どもたちには。浮浪児は全国を浮浪してましたから、私たちは引き受けの親元を探すのが、大きな仕事でしたね。そして、いろんな形で引っ張り出してきて、分かると帰りたくないもんですから、またダツと逃げるわけです。本当に遅かったですね。泥棒も上手でした。

ちょっと、女性の皆さんに話すのは、話づらいのですが、韓国人のある女の子で中学生くらいですが、ものすごく盗みがうまいんですよ。鍵のかかる部屋に入れておって、風呂に入れて、外で女の子を待っているわけです。そしたら、音がしな

いような気がするから、戸を開けたら、衣類はみんな置いてあるんですよ、素っ裸で風呂の窓から外へ飛び出してるんです。「逃げた」と言っていて、その頃私たちはすぐ山口駅に見張り番に行くんですよ。そしたら30分くらいしたら、上から下まで全部新しい洋服を着てその子が現われるんですよ。駅に来る間に下着から何から全部盗ったんでしょう。そのくらい盗みに長けていました。この子はその後北朝鮮に帰りましたが、向こうで、名のあつた人になっていると聞いています。かわいい子でした。

泥棒の上手な子というのは頭がいいんです。だから私なんか、子どもに教えてもらって、実際やったことはないですが、手口はたくさん知っています。その子どもたちの盗みの、盗り方とか場所とかそういうことで、非行の度を判定するわけです。黙って盗ってくるのだったら一番ランクは低いんです。それはもう頭を使いますね。例えば、金庫を持って出るのにタオル1枚を金庫の上にかぶせて、堂々と店番をしている前を通るといいます、絶対に見つからないと。そういうことに、すごい頭を使っていますね。

そのころの子というのは、こちらが優しくしてやればすぐなついてきましたね。

こちらの大学に勤務するまで24～5年くらい相談所におったんですかね。終わりの頃（昭和55年頃）出会った子で、今お付き合いしている子は一人も居ません。関係が切れますね。こっちも本気でなかったのかもしれないですが、私の若い頃出会った子どもというのは、みんな今でも仲良しですよ。さっき言いましたように20人くらいの工場の責任者になっている人もいます。私の女房に言わしたら、来るたびに連れてくる男が違うね、という子もいます。子どもたちから、すごくいろんなことを学ばせてもらいました。

16. おわりに

今日は、わけの分からんことを話しました。しかし、山口の児童福祉の歴史も奥が深いですよ。あまり知られていませんが、例えば、刑務所の中

で、服役者の女性が出産して赤ちゃんができるわけです。1年間は刑務所で育てることができる、それ過ぎたらもうできないのです。「携帯乳児」と言うんですが、それを最初にお世話されたのが徳山のお寺さんでなかったかと思います。これは、誰だったか記録に残しておられる。それから、長門に確か尼寺があるじゃないですか。あそこが、いわゆる日曜学校という説もあるんですけど、漁師の子を預かって保育をしていたという言い伝えがあるのです。何とそれが世界で一番古い保育所ではないかと言われています。これは何度か人に聞きました。根拠があるわけじゃないんですよ。でもイギリスから、オックスフォード大学から調べに来たという話を聞きました。そういうのも、きちんと掘り起こしていくと良いですね。

<K>本当に今日はありがとうございました。

- 1) インタビュー調査は、2007年5月23日10:30～12:30山口県立大学加登田研究室にて実施した。なお傍聴者は加登田ゼミ生。
- 2) 昇地三郎;1906(明治39)年一。岩国中学・広島師範・広島高師・広島文理科大学(心理学科)卒業。医学博士(九州大)、文学博士(広島文理大)小学校・女学校・師範学校の教員を経て、福岡教育大学名誉教授。韓国大邱大学大学院長。ペスタロッチ賞(昭和31年)ペスタロッチ教育賞(平成19年)を受賞。昭和29年、しいのみ学園を創立。昭和53年、社会福祉法人精神薄弱児通園施設「しいのみ学園」理事長・園長。
- 3) 河合隼雄;1928(昭和3)年～2007(平成19)年。教育学博士(京都大学)京都大学名誉教授、元文化庁長官。専門は臨床心理学、ユング心理学。日本におけるユング心理学の第一人者。
- 4) 牛島義友;1906(明治42)年～1999(平成11)年。元九州大学教授、元青山学院大学教授。戦後、愛育研究所での「教育相談(教養相談)」から愛育養護学校の設置をへて、1961年には知的障害者入所施設「御殿場コロニー」を創設。知的障害児の<社会的成熟度>の評価法やコミュニティ心理学等を研究した。『精神薄弱児の治療教育 上・下』(1973)、『精神薄弱児の治療教育シリーズ 1 コロニーへの道』(1973)、『福祉の哲学と技術』(1980)
- 5) 中修三;1900(明治33)年～?、医学博士。著書に『できる子供できない子供～脳髓の発達と教育～』、『中修三教授還暦記念論文集』(1961)他
- 6) 近藤益雄;1907(明治40)年～1964(昭和39)年。戦前より「生活綴り方教育実践」で知られていたが、1950年に校長を辞め小学校に知的障害児のための特別学級(みどり組)を創設してその担任となった。その三年後、自宅を用いて「のぎく寮」(1962年に「のぎく学園」1979年に閉園)を設立し障害児と生活をともにした。「のんき・こんき・げんき」という実践論理は、近藤による言葉として有名である。『その花はまずしくとも』(1959)、『近藤益雄著作集・全8巻』
近藤原理は、近藤益雄の次男である。近藤原理は父母(益雄・えい子)が運営していた「のぎく学園」(1979年に閉園)から分かれたかたちで設立された「共同生活の家・なずな園」(1962年設立)で、やはり知的障害と家族ともども生活を共にして歩んできた。この「なずな園(2000年に閉園)」は、「のぎく学園」と同じく、法的な認可型施設ではなく、あくまでも個人契約による任意生活ホームであった点が特徴である。『障害者と泣き笑い三十年』(1986)
- 7) 1947～2001年まで、障害児を対象とする教育を「特殊教育」と呼んでいたが、現在は障害をspecial needsと捉える「特別支援教育」と称されている。
- 8) 山口県における特殊学級は、昭和23年4月の阿武郡阿武町奈古小学校、続いて同年5月の下関市本村小学校の2クラスから始まった。当時、特殊学級による特殊教育は緒についたばかりで、文部省も指導要領を提示していなかった。暗中模索していた下関市本村小学校を中心とする特殊学級担任者は、全国に呼びかけて昭和27

年1月、下関市本村小学校で「第1回特殊学級研究協議会」を開催した。また、当協議会の盛り上がり背景として、同年9月に「山口県特殊教育連盟」を発足させている。(『山口県政史』1012頁)

- 9) 1949年、ウェクスラーによって考案された児童向けの知能検査。
- 10) GHQは日本の教育制度の管理制度につづいて、昭和21年5月に「教職員ノ除去、就業禁止及び復職等の件」を公布した。これにより、各県では「教職員適格審査委員会」が組織され、山口県では1万856人が審査され、最終的な県下教職員不適格者は71人であった。その後の再審査で10数人が適格となった。
- 11) 友田不二男；1917（大正6）年～2005（平成17）年。日本のカウンセリング研究・実践の草分けの一人。ロジャースの著書の翻訳と紹介に先導的な役割を果たした。人間というものの真の飛躍もしくは成長は、完全に一人ぼっちである時に生起するという『ブライアンの真空』論が有名。

SUMMARY

Voice of the Past:

Oral History about the Child Welfare in Yamaguchi 1945-1960

Yasushi Tsubogo

Keiko Katoda

This report is a record of the interview to Prof. Y. Tsubogo by Prof. K. Katoda.

Prof. Tsubogo is a professor emeritus at Yamaguchi Prefectural University. Moreover, he is a person who assumes the position of child psychology counsellor's employment at the beginning in Yamaguchi Prefecture. So he knows the child problem in Yamaguchi Prefecture in 1955's and the situation of Child Guidance Center in detail.

He talked about the following.

- 1) About people to whom he received the influence in work

- 2) About pioneers of education for children with special needs in Yamaguchi Prefecture in 1945's
- 3) About the consultation of the child with special needs in 1945's
- 4) About the influence that GHQ gave to the special education of Yamaguchi
- 5) About the event and episode concerning a child welfare at that time
- 6) About a child welfare staff at that time
- 7) About meeting the Method of Counseling
- 8) About the overseas study and meeting of the Normalization
- 9) School days
- 10) Meeting of children